[相模の大凧]

大凧の歴史は、古くは、天保年間（1830年頃）からといわれ、本格的に大凧となったのは、明治中期からです。

当初は、個人的に子供の誕生を祝って揚げられていましたが、次第に豊作祈願、さらに若者の意志や希望、国家的な意義を表徴するものなど、個人的なものから、地域的なものへと移り、戦前戦後をとおして、新磯青年団が主催して、毎年新戸、勝坂、下磯部、上磯部、の4会場で行われておりましたが、年とともに移り変わり、昭和44年からは、相模原市の5大観光行事に選定され、前記の4地区が毎年交代で実行委員会を組織し、会場は持ち回りで開催してきました。

しかし、社会情勢の変化などから技術の継承や会場の確保などが危惧されるようになり、現在では「相模の大凧まつり実行委員会」によって開催されております。

大凧の題字は、市民から募集して選定し、元字は、相模原市長が直筆し、それを元に大凧文字に書き直します。大凧には、その年の題字が書かれていますが、昭和39年度は東京オリンピックを祝って「祝輪」、平成4年度は新磯小学校百周年を記念して「新磯」、平成5年度は皇太子殿下のご成婚を祝って「慶祝」、平成13年度は新世紀にちなんで「紀風」、平成19年度は皇室の親王誕生のお祝いと合併した相模原市の繁栄を願って「悠風」など、その時々の世相を反映したものとなっております。平成22年度は、相模原市の政令指定都市移行を祝して「祝政」、本年は「潤水都市さがみはら」の思いを風にのせてとの意味を込めて「潤風」（じゅんぷう）と決まりました。

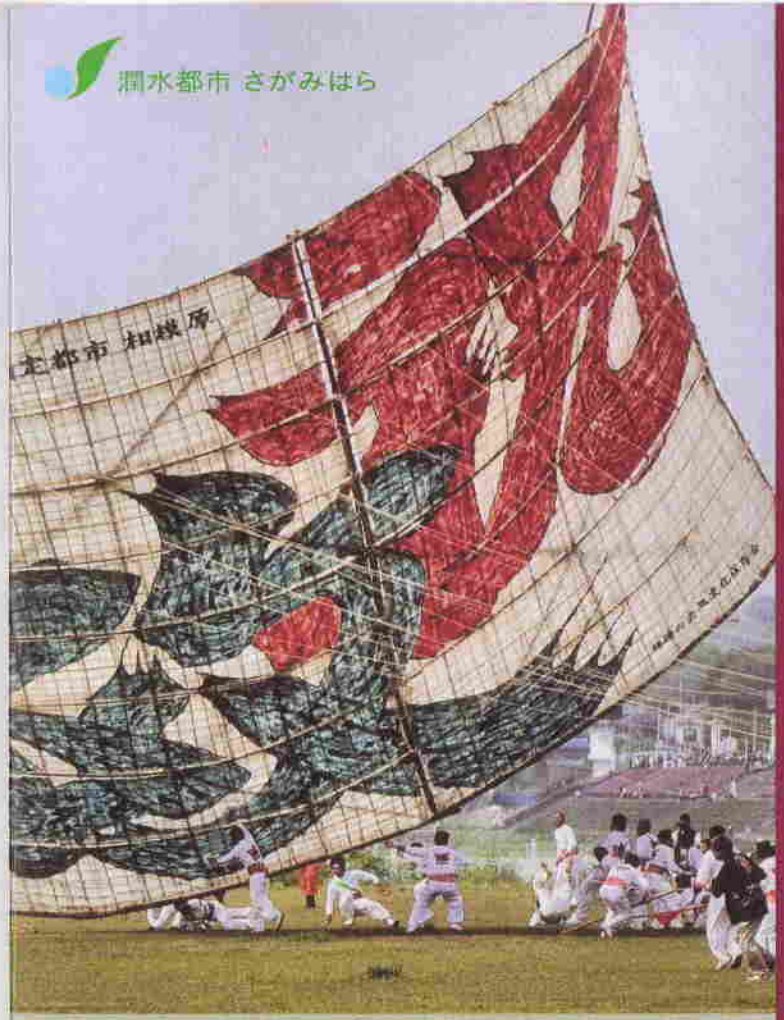
相模の大凧は、昭和52年には、「かながわの民俗芸能50選」に、昭和57年には、「かながわのまつり50選」に選定されています。平成3年には、国の文化財新指定「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の中に「関東の大凧揚げ習俗」が選定されました。もちろんその中には、相模の大凧が含まれていることはいうまでもありません。また相模の大凧文化保存会では、伝統文化の保存・継承が認められ、平成16年11月に神奈川文化賞を受賞しました。そして平成22年4月1日には相模原市指定無形民俗文化財に指定されました。

◆凧の大きさ

新戸8間、勝坂5間、下磯部6間、上磯部6間

◆大凧の概要（8間）

大きさ	14.5m（8間）四方	凧揚げに必要な人員	
重　さ	約950kg		80～100人
綱の長さ	約200m	凧揚げに必要な風速	
綱の太さ	直径3～4cm		10～15m



相模の大凧まつり

日本一

2012

5月

4日 金

5日 土

AM 10:00

PM 4:00

被災地へ、復興をお祈りし
大凧を大空へ

復興祈願

絆

各会場間無料巡回バス運行

巡回バス　相模台下町＞大野センター＞上磯部会場＞下磯部会場＞新戸・勝坂会場＞相模台下町

会場　○新戸会場（新戸スポーツ広場）　○勝坂会場（新戸スポーツ広場）
○下磯部会場（磯部保育園下流）　○上磯部会場（巴橋の東下広場）

主催／相模の大凧まつり実行委員会
後援／相模原市、相模原市観光協会、神奈川県、（社）神奈川県観光協会、相模原市商工会議所、（社）相模原法人会、（公財）相模原市都市整備公社、新磯地区自治会連合会、新磯観光協会、東日本旅客鉄道（株）横浜支社、小田急電鉄（株）
協賛／相模原市印刷広告協同組合、（有）諸観光

日本一 相模の大凧まつり

会場案内図

おもな交通機関

新戸・勝坂会場（新戸スポーツ広場）

小田急線　相武台前駅下車
▼
神奈中バス　相武台下駅下車徒歩15分
JR相模線　相武台下駅下車徒歩15分

下磯部会場

小田急線　相武台前駅下車
▼
神奈中バス　新磯まちづくりセンター前下車徒歩10分
JR相模線　相武台下駅下車
▼
神奈中バス　新磯まちづくりセンター前下車徒歩10分

上磯部会場

JR相模線　下溝駅下車徒歩5分
神奈中バス　下溝下車徒歩5分

各会場間は徒歩および巡回バスにて移動できます。
（巡回バスは無料です）

巡回バス　相武台下駅 ➤ 大凧センター ➤ 上磯部会場 ➤ 下磯部会場 ➤ 新戸・勝坂会場 ➤ 相武台下駅

各駐車場が狭いので出来るだけ公共交通機関をご利用されますようご協力ください。

相鉄延長日本一のさくら「相模の大凧　下磯部会場から新戸会場間」
今年の見頃は気象状況により多少ずれ込むかもしれません。ご了承ください。